

三井のリフォーム住生活研究所 所長 西田 恭子

猟師、木を見て森を見ず

一〇〇円ショップでのごと、瞬間接着剤を買いにきただけなのに、木工用・革用・ガラス用・またそれらを組み合わせ両方使えるなど、種類の多さに驚かされた。最近の一〇〇円ショップは、商品が充実していて馬鹿に出来ない。どれにするかあれこれ検討していると、同行していた人が、「悩むほどのことではないのでは？」とイライラした口調で決断をうながした。

私は、あわてて商品を選び、清算をすませたのだが、同行の人に、「あなたは一〇〇円のものを買う時も、数十万円のものを買う時も同じ悩み方をする！」と、さらに言われてはっとした。

たしかに「一〇〇〇倍も価格が違うものを、「正当な価格だろうか？ 本当に使うだろうか？ 今必要だろうか？ 多すぎるのではないか？」など、ありったけの質問を、頭の中に並べて検討している。買って失敗したからといって、私のお財布に体制的な問題はないだろうし、悩む時間の方がもったいないと言える。なぜ、このような思考をするようになったのだろう

か？ やはり仕事柄、設備機器などを選定するとき、あるいは内装材を決めるときには、あらゆる商品を検討し、知識をかき集め依頼主にとっての最適はどれかを模索する習慣がついてしまっているのだ。

高いものがないとは限らない、多機能であることがいいとも限らないが、知らないまま切り捨てることはできず、生活を見据えた総合判断として決定していく。予算を含め、すべてを検討してから判断しないと気が済まなくなっているのかもしれないのだが、これを一〇〇円ショップでやるのは、「馬鹿な考え、休むに似たり」と、同行した人は言いたいのだろう。

職業病かもしれない、これはあぶない、気をつけなければ！ 頭のシワをむやみに増やしてもしかたがない。仕事の時と、プライベートでの思考を分ける習慣をつけなければだめだ……そんなことを思っているとき、もう一つの格言が浮かんだ。「猟師、木を見て森を見ず」である。これは詳細な納まりにこだわらずに、家全体のバランスを置

き去りにしてしまう、設計者が陥りそうな、そして決してあってはいけないことだ。そういえば、我が実家には似つかわしくないホテル仕様の立派なトイレを作ったことがあったなど、古傷(?)を思い出してしまった。親孝行とデザイナーとして親に認められたい気持ちがあればたいていのことだ。

リフォーム費用は、数十万円から数千万円まで幅が広い。それを同じ視点で判断するのは何かが違うだろう。改装する部分を足し合わせて、その数が大きければ大型リフォーム、小さければ部分リフォームというだけではなく、家全体の中でリフォーム部分が果たす役割を、コストと照らし合わせて総合的に考えるべきだろう。

一〇〇円ショップでは、つい安さに引かれて必要以上に買い込むという人がいるが、どうやらそれは私にはないのだが、ただ、たまには考え過ぎずに無駄と知りつつ行うことがあってもいいのかもしれない。なぜなら両親は立派なトイレを喜び、今もそのまま使ってくれているのだから。



西田恭子氏のプロフィール「一級建築士。「三井のリフォーム」で設計を手がけ二五年。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム住生活研究所」の所長に就任。新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。日本女子大学非常勤講師。(社)日本建築家協会正会員。